
虚空の戦場

桜田響介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚空の戦場

【Nコード】

N0949A

【作者名】

桜田響介

【あらすじ】

人類が宇宙に進出して既に70年。繁栄の時を享受する人類に新たな試練が待ち受けていた…

ターン1：邂逅（前書き）

初心者でつたない文章ですがよろしくお願いします

ターン1：邂逅

宇宙暦72年 火星衛星軌道上 地球軍戦略衛星 「ダイタ

ロス」

「こちら地球軍司令部、ダイタロス聞こえるか。」

『こちらダイタロス。感度は良好です。』

「ダイタロス、異常はあるか？」

『無いですねえ。静かなもんです。』

「戦略衛星とは言え人類が進出している最果てだからな。平和で当然か。」

『ま、その分楽な仕事ですけど。』

「確かに。そんな所なら宇宙海賊も来ないだろう。」

『そうですね…』 その時メインコンソールのランプが点滅し始めた。

それと同時にけたたましい警告音が鳴り響く。

「どうしたダイタロス!？」

『分かりませんっ! あ…レーダーに機影! 方位6 411、距離700!』

「なんだ! 海賊か!？」

『いえ違います! ライブラリ照合…該当無し! これは…円盤か? なんてサイズだ…!』

「どうしたダイタロス！」

『今確認したのですがサイズがデカすぎます！』

「どれくらいだ！？」

『約直径：400キロです！！』

「な…そんなバカな！レーダーの故障じゃ無いのか！？」

『いえ、違います！さらに接近！距離300！』

「ダイタロス、攻撃は受けているか？」

『いえ今のところは受けていません。』

「よし、今の間にデータを集めてくれ。重要な資料になるかも知れん。」

『了解です。そちらにデータを転送します…！？これは…ああっ、ヤバイ！！』

「どうした！？」

『円盤に高温の熱源を確認…レーザーです！』

「なにに！？」

『撃つてくる気だ！総員退避！繰り返す！総員退避！…うぐわあああ…！』

「ダイタロス！？応答せよダイタロス！」

『……………』

「ダイタロス！どうした応答せよ！ダイタロス！！」

ターン2：戦士

人類が宇宙に進出して既に70年。

人々はコロニーや月面都市に住み、繁栄の時を享受していた。

宇宙暦68年、木星探索船「トワイライト」があるものを持ち帰った。

それは、現在の地球の科学力でも作る事のできない合金で出来た、戦闘用の兵器だった。

この発見により、地球外の知的生命体による地球侵攻も有り得ると判断した地球軍総司令官ドワイト・ラスター大將は高機動汎用人型戦闘兵器「バトルモジュールの研究・開発計画」、「プロジェクト・ヘパリストス」を発動。

姿無き侵略者に備え軍備を増強していた。

誰もが戦乱の予兆を感じていた：

宇

宙暦74年 月〱火星の中間点

轟音と共に大型の戦闘艦が爆発した。

オペレーター

「ライドマッター、撃沈！BM隊後退！」

索敵手

「敵、なおも来ます！数、20！」

地球軍中型戦闘艦エルベラの艦長アレン・ベイカー小佐は目前で起こっている事が信じられなかった。

月基地から出撃した時23隻あった戦闘艦はもはや彼の指揮するエルベラと護衛艦のオライブだけになっていた。

その戦闘艦に搭載されていたBM「バトルモジュール」も10数機を残すのみとなっていた。

彼我戦力差40対1。

無理以外の何物でもなかった。

ポーカーフェイスで有名な副長のノリス大尉が絶望の表情を浮かべている ノリス

「艦長！これ以上は持ちません！撤退を！」

アレン

「艦の稼働率は！？」

オペレーター

「40%を切っています！」

クソっ、何が簡単な任務だ。

アレンは心の中でこの任務を立案した軍上層部に毒づいた。

アレン達の受けた命令はポイントレッド3に潜んでいる、インベ
ダの艦隊を全滅させる事だった。

それが今やこちらが全滅寸前だ。

アレンは決断を下した。

アレン

「総員に通達！本艦はこれより撤退行動に移る！繰り返す！本艦は
これより撤退行動に移る！」

その命令を量産型BMレギオンのコクピットで聞いていた
アクセル・レイナー大尉は、軍の訓練キャンプ以来の相棒、マッ
クス・ドレイル大尉との秘匿通信回線を開いた。

アクセル

「おいマックス、撤退命令出ちまったぜ。」

マックス

「みたいだな。」

どうする？戦力的には正しい判断だが……」

アクセルの熱血で暴発し易い性格に対し、マックスは冷静で物静かな性格で二人の息はピッタリだ。それぞれが

「蒼い剣」

「紅の砲手」

という通り名を持つ程の凄腕BM乗りとして軍上層部にも注目されている。 アクセル

「なあマックス。俺いい事思いついたんだけどよ…」

マックス

「最後まで言う必要は無いぞ。お前の考えてる事は大体わかる。」

アクセル

「さすが相棒。分かってらっしゃる。」

マックスの勘の良さにアクセルは微笑を浮かべた。 アクセル

「で、どう思う？」

冷静な判断の出来る相棒にアクセルは意見を求めた。 マッ

クス

「危険だが…戦況を好転させるしか無いな。」

アクセル

「やるか？」

マックス

「いいだろう。」

二人は、それぞれの戦闘スタイルに合わせて装備された主兵装を腰のウェポンラッチから取り外し、レギオンの右マニユピレータにセットした。 アクセル

「艦長に言った方がいいかな？」

これから行おうとする事の危険度を分かっているアクセルは、艦長への報告をするかしないかで迷っていた。

横で主兵装のレーザランチャーをチェックしているマックスはにべもなく答えた。 マックス

「一応は報告した方がいいかも知れないな。」

アクセル

「だなあ。」

アクセルはレギオンのコックピットコンソールの通信スイッチを入れた。 アクセル

「こちらアルファワン、エルベラ、応答願います。」

アレン

「どうした、大尉！撤退命令が聞こえなかったか！？」

艦長の大声におもわず顔をそむけた。

と言ってもヘッドセットはヘルメットに埋め込まれている。 アクセル

「いえ、聞こえました。でも撤退する前にちよつとやりたい事が……」

アレン

「何をだ？」

言っても駄目だろうなあ、と思いつつアクセルは自分の計画を話した。 アクセル

「敵の母艦落つことしてきます。」

アレン

「な……何だとっ！？そんな事は許さんぞ！！今すぐ帰投しろ！！」
相手の大声にイライラしたアクセルは通信不良のふりをした アクセル

「すいません、艦長。通信状態が悪くて……プチッ」

そのままの流れで自機の主兵装の82ミリ重機関銃に200連発マガジンを差し込んだ。 マックス

「艦長どうだった？」

アクセル

「駄目だ。聞く耳持つてねえ。」

マックス

「それでいつもの手か。ま、構わんがな。」マックスは自分のレーザーランチャーの銃肩を機体にあてがい準備を完了した。 マックス

「こちらは準備完了した。そっちはどうだ？」

アクセル

「こつちもOKだぜ。」

マックス

「よし、いくか。」

アクセル

「おうっ！」

ターン3：剣舞（前書き）

改行の仕方が分かったので読みやすくなったと思います。よろしく
お願いします（＾－＾；）

ターン3：剣舞

二人はほぼ同時にスロットルレバーを「MAX」の位置まで押し込んだ。

機体がむちうちになりそうな勢いで発進した。

最高速まで加速しながら敵艦隊に突撃する。

二人に気付いた敵が弾幕射撃を行ってくる。 アクセル

「マックス！1時方向から馬鹿みてえに撃ってくる連中を黙らしてくれ！これじゃ母艦に攻撃できねえ！！」

アクセルは雨あられと飛んでくる光弾をかわしながらマックスに援護射撃を頼んだ。

マックス

「了解だ。しばらく囷をやってくれ。」

アクセル

「OK！」

マックスが狙撃する時間を稼ぐ為にアクセルは回避運動をしながら敵の前にでる。

アクセル

「ほらほら！撃ってきやがれ！宇宙人共！」

敵の砲火がアクセルに集中した。

アクセル

「今だ！相棒！！」

マックスはレーザーランチャーの出力を最大まで上げ、敵部隊のド真ん中に照準を合わせた。 マックス

「アクセル！当たるなよ！」

マックスはアクセルに当たらない事を祈りながらトリガーを引いた。最大までチャージされたレーザーランチャーは敵部隊の半数を行動不能に追い込んだ。 アクセル

「やるな相棒！」

マックス

「軽いものだ」と言いたい所だが今のでランチャーがバレルヒートを起こした。しばらくは撃てん。」

そう言いながらマックスはレーザーランチャーを腰のラッチにしまい、標準装備のレーザーライフルを構えた。 アクセル

「あれだけやってくれりゃあ充分だぜ。さあて、今度は俺の番だ！！」

そう言うときアクセルは重機関銃を連射しながら、敵の母艦に突撃する。

マックスも追従しながらレーザーライフルで正確に敵母艦の迎撃砲座を潰していく。

穴の空いた迎撃網を抜ける事は、アクセルにとって朝飯前だ。

アクセルは母艦の壁面スレスレを高速移動しながら重機関銃弾を撃ち込んだ。

あちこちで小規模な爆発が起こる。

アクセル

「んじゃ、仕上げといくか！」

レギオンの大腿部には近接近戦用の非実体剣レーザーブレードが格納されている。

アクセルはそれを取り出し左のマニピレータに握った。

スイッチが入り青色の光と熱量で構成された刃が現れた。

レーザーブレードを逆手に握ると、アクセルは敵母艦の艦橋部へ突撃した。

重機関銃を撃ちながら、艦橋部とすれ違う。

そのすれ違いざまにレーザーブレードで艦体から艦橋を切り離れた。

そのまま高速で敵艦から離れた。後ろでひとときワデカい爆発が起こる。 アクセル

「どうだ？相棒。」

マックス

「さすがだな。」

アクセル

「腹も減ったし、帰投するか。」

マックス

「そうだな。しかしまた艦長から雷が落ちるぞ。」

アクセルはその言葉を聞いて肩を落とした。

艦長の説教は運が悪いと2時間は軽く超える。 アクセル

「はあゝ。飯の前に説教か。」

マックス

「ばやくな。仕方あるまい。私も受けるのだから。」

二人は重い気分で機体を艦への帰還コースにセットした。

ターン4：帰還報告

アレン

「君達は自分のやった事がどういう事なのか分かっているのか!？」

アクセル&マックス

「・・・」

敵の母艦を落としてエルベラに帰還した二人を待っていたのは、予想通りの叱責だった。

着艦してすぐに艦長室に呼び出された二人は、もう2時間近く直立不動の姿勢で艦長の怒りが収まるのを待っていた。

アレン

「今回は偶然成功したから良かったものの、失敗したら貴重なBMを失う所だったんだぞ!!」

アクセル

「艦長、偶然じゃ無いんですけど…」

この言葉が、艦長の怒りの火に油を注いだ。

アレン

「大尉！君の辞書には反省という文字は無いのか!!」

アクセル

「すみません…」

やぶへびに終わった言葉を出したアクセルは後悔していた。これで更に時間が伸びる。

アレン

「本来ならば謹慎処分となるところだが…」

謹慎と聞いてアクセルが身を乗り出した。

アクセル

「ち…ちよつと待って下さいよ艦長！敵の母艦落つこととして友軍助けたのに謹慎ですか！？そりゃあ無いですよ！！」

謹慎イコール減給になる軍では謹慎は一番貰いたくない処分だ。

マックス

「自分も謹慎は不服です！」

この時ばかりはマックスでも異議を唱える。

アレン

「落ち着きたまえ二人共。本来ならば、と言っただろう。」

その言葉の意味がわからずアクセルとマックスは顔を見合わせた。

マックス

「と言う事は謹慎処分は無し、と言う事ですか？」

アレン

「ああ。まずはこれを見てくれ。」

そう言うのと艦長は隔壁に埋め込まれたモニターを起動した。

そこに映し出されたのは戦艦のワイヤーモデルだった。

アクセル

「これは？」

マックス

「戦艦だな。しかし、見たことのないタイプだ。強いて言えばランディア級揚陸艦に似ているが…艦長。この艦は何ですか？」

艦長は立ち上がるとモニターの横に立った。

アレン

「これは、現在月の兵器会社バートウエル社が地球軍と共同開発している対インベーター用の新型戦闘艦、ノアシップ級の一番艦「ヴァルキリー」だ。」

アクセル

「ヴァルキリー……でもこの戦艦と俺達の処分がどう関係あるんですか？」

アクセルはいまいち状況がわからなかった。

アレン

「君達はこの艦に、新型BMのパイロットとして転属する事になった。」

アクセル&マックス

「ええええっ！！」 アレン

「詳細は基地に帰ってから通達があるだろう。以上だ。二人共疲れているだろうからシャワーでも浴びてゆっくり休むといい。」

アクセル

「でも艦長……」

どうしていいのか解らなくなったアクセルは、艦長に質問しようとした。

アレン

「私もほとんど知らされていないんだ、大尉。私も知っているのはここまでだ。」

疲れた表情で艦長が言った。

これ以上言々と神経性胃炎になりかねない。

二人は答えを今求めない事にした。

マックス

「了解しました。では、失礼します。」

二人は敬礼し艦長室を出た。

シャワー室に歩きながら（地球軍の戦闘艦は居住ブロックを回転させて、疑似重力を発生させている）今の事を議論する。

アクセル

「どう思っよ、相棒。」

マックス

「解らんな。私達は新型機のテストパイロットになれる程の人材か？」

アクセル

「だよなあ。そりや他の連中に比べりや多少はマシだけど、テストパイロットには…なあ。」

マックス

「だろう。と言うことは新型がよほど危険な機体か…」

アクセル

「いわく付きかのどっちか、って事だろな、多分。」

シャワー室に到着し、軍服を脱いで生ぬるいシャワーを浴びる。

浴びながら二人は気分が落ち込んでいくのがわかった。楽観的な予想は、出来ない。

ターン5：新たな力

エルベラの艦橋のモニターいっぱいには月基地が映し出されていた。

管制官

「こちら中央管制室。そちらの所属・艦名・艦長を述べられたし。」

アレンは管制室から送られる、事務的な命令に溜め息をつきながら答えた。

アレン

「こちら地球軍第17混成宇宙艦隊所属、エルベラ。艦長はアレン・ベイカー小佐だ。」

照合をおこなっているらしく、しばらくの沈黙が続く。

管制官

「こちら管制室。エルベラ、入港を許可する。20番ベイに停船せよ。」

アレン

「了解。感謝する。通信終了。」

指定されたベイに艦を止めると、様々な整備要員がエルベラの船体にケーブルやパイプを繋いでいく。

基地からのエネルギー供給を確認すると、機関長がメインジエネレーターを停止した。

アレン

「全乗組員に告ぐ。作戦行動終了。これより、半舷休息とする。ご苦労だった。」

艦橋にも安堵の溜め息がもれる。

アレンが肩の力を抜いた時後ろから声がした。

伝令員

「アレン艦長。アクセル・レイナー、マックス・ドレイル両大尉を司令室へ出頭させよ、とラメル司令官からのご命令です。」

ついに来たか、アレンは伝令員を振り返りながら答えた。

アレン

「了解だ。すぐに行かせると伝えてくれ。」

伝令

「はっ。」

非の打ち所の無い敬礼をして伝令員は艦橋を出て行った。

アレン

「あの二人どうなるやら……」

15分後。アクセルとマックスは立派な扉の前に立っていた。扉には「司令室」とプレートが掲げられている。呼び出された二人は固くなっている。

アクセル

「…相棒、覚悟決まったか？」

マックス

「行くしかあるまい。」

アクセル

「だよな。」

二人は覚悟を決めて扉をノックした。中からくぐもった返事が聞こ

えた。

ラメル

「入りました。」

扉が自動で横にスライドし二人は中に入った。

アクセル

「失礼します。」

マックス

「アクセル・レイナー、マックス・ドレイル両大尉命令により出頭しました。」

ラメル

「うむ。二人共よく来てくれた。まあ腰掛けたまえ。」

二人は勧められるままに二人掛けのソファーに座った。

アクセル

「ラメル司令、我々の異動について説明していただけますか？細かい説明を受けていないんですが…」

二人は今自分達の置かれている状況を把握しようと質問をした。

ラメル

「うむ。君達を新型機のパイロットに選んだのは、上層部でも君達の技能を高く買っているからだよ。」

アクセル&マックス

「はあ…」

予想外の答えに困惑する二人。

ラメル

「戸惑うのも無理は無い。だがまずは実物を見てみるといい。」

二人はラメル司令の後ろを付いていく。すれ違う人間は一般兵から

上級士官までラメル司令に立ち止まって敬礼する。それに短い答礼をしながら説明をする。

ラメル

「君達に与えられる機体は、現在の主力機レギオンを総合的に発展させた、新型量産機だ。と言っても、今完成しているのは君達用の二機だけだが。」

アクセル

「そんな貴重な機体、俺達で使っていいんですか？」
二機しかないと聞いてさすがにビビる。

ラメル

「構わんよ。君達なら一番上手く扱ってくれるだろう。」

基地深部に向かうエレベータに乗ると、ラメル司令は二人を真っ直ぐ見た。

ラメル

「いい機体だ、ということは私が保証する。君達も気に入るはずだ。」

「

マックス

「はあ……」

エレベータが止まった。

ラメル

「さあ、着いたぞ。」

エレベータの戸が開くとそこはBM用の格納庫だった。

目の前には運搬用のゲージに固定されたBMが二機、並んでいた。

ラメル

「これが新型量産機レギオンmk-2の試作1号機と2号機だ。」
角張ったレギオンとは違い、曲線と鋭角が絶妙にマッチしたデザイン。

兵器には似つかわしくない純白の塗装。

頭部ユニットのこめかみの部分からは斜め後ろにブレードアンテナが伸びている。

二機はほとんど同じ外観だが、肩アーマーは一方が紅、他方は蒼に塗られていた。

ラメル

「どうかね？ 気に入ったかね？」

アクセル

「はあ……」

マックス

「これはもう……」

二人の声が自然に揃う。

アクセル＆マックス

「ロボットアニメの世界ですねえ。」

満面の笑みを湛えたラメル司令は満足そうだ。

ラメル

「詳しい話は技術士官のミリス中尉から説明してもらおう。」

いつの間にかラメル司令の横に小柄な女性が立っていた。背丈はアクセルの肩程だ。

ミリス

「レギオンmk-2の開発を担当したミリス・ベケット中尉です。」
正確な敬礼をするところから几帳面な性格のようだ。

マックス

「中尉、さっそく説明をしてくれないか？」
機体を凝視しながらマックスが言った。

ミリス

「はい。まず従来のレギオンからの改良点ですが、ジェネレータを核反応式から核融合式に変更しました。これにより機関部が小型化され、出力も30%アップしています。次に装甲を超硬度スチールの単層タイプから高純度チタン・セラミック・カーボンの複合多層タイプに交換してあります。」

更にOSをAN-2から、より計算の早い……」

アクセルは頭が痛くなってきた。

B Mを乗りこなすコツは頭で考えるのではなく、体で覚える事だ、
と言うのが彼の持論だからだ。

アクセル

「ああ、もういいや。武装はどうなってる？」

投げやりな態度にミリスは少しムツとしたが素直に答えた。

ミリス

「基本武装はレギオンと同じ66ミリレーザーライフルとレーザー
ブレードですが、新たに固定兵装として両脇腹に57ミリ短射程機
関砲を装備しています。近接防御に有効です。更にお二人には専用
兵装を用意してあります。こちらにどうぞ。」

ミリスに連れられるままに歩くと、クレーンに吊り上げられ調整さ
れている武装があった。

マックス

「これが専用兵装なのか……」

ミリス

「はい。まずアクセル大尉は近接格闘戦が得意とお聞きしたので、
主兵装をレーザーライフルから、新開発の88ミリ徹甲弾を使用す
るグレネードランチャー付き重機関銃に変えています。更に機体の
エネルギーを使用せずに使える実体剣「マルスギア」を左腰にセッ
トしています。試験時にレギオンを斬ったら真つ二つに切れました。
切れ味は保証付きです。勿論、OSもCLに設定済みです。」
そこまでの説明を聞いてアクセルにある疑問が浮かんた。

アクセル

「中尉、俺の機体遠距離用の武装は一切無し？」

ミリス

「ええそうです。必要無いと判断しました。」

さらりと言われた。

アクセル

「出たトコ勝負って事か……」

溜め息が出る。まあ格闘戦好きだけど、と心の中でポツリと言う。

マックス

「私の機体はどうなっている？」

マックスは自分の使う機体を熟知しないと、気の済まない人間だ。

ミリス

「マックス大尉の機体は遠距離射撃・砲撃戦用にセッティングしています。基本武装に加え両肩上部にはクラスターミサイルの連装ポッドをセットしました。更に兵装開発部の試作したBM用のレイルガンロングレンジを装備しています。OSもLRの設定です。」

マックス

「かなりの重装備だが、機動性は？」

ミリス

「アクセル大尉の機体に比べ、多少劣りますがそれでもレギオンよりは高いです。」

アクセル

「どっちもすぐ動かせるのか？」

試し乗りがしたくて堪らないアクセルはおもわず聞いた。

ミリス

「一応動かせる事は動かせますが……」

その瞬間上の方から轟音と振動が伝わってきた。

同時にけたたましい警報が鳴り響き、赤いランプが点滅した。

ターン6：襲撃（前書き）

遅れてすみません（汗）

ターン6：襲撃

ラメル

「ど、どうした！」

マックス

「振動の伝わり方して恐らく、爆発……！」

アクセル

「爆発だとお！？どこかで実験ミスったのか？」

ミリス

「今は何の実験もしていないはずです！」

状況の掴めない格納庫に伝令が走ってきた。

伝令

「ラメル司令！インベーダの艦隊に攻撃を受けています！」

ラメル

「何だと！？索敵手は何をしていた！」

伝令

「それがリーダーがちょうど整備中だったので……」

また大きな爆発が起こる。

ラメル

「気付かなかったか！なんて事だ！」

ラメル司令はそこで言葉を切り、暫く目を閉じて考えた。

ラメル

「総員第1級戦備配置！寄港しているすべての部隊を出撃させる！この基地を守り抜け！」

伝令

「はっ！」

ラメルの命令が基地中に広がった。

全区画で照明が通常の白から赤の戦闘照明に変わる。あちこちから怒号が聞こえる。

「修理中の艦艇は奥に動かせ！出撃出来んぞ！」

「道を開ける！B Mが発進できない！」

指揮体系が乱れ、統率のとれた行動ができなくなっている。

アクセル

「マックス、このままじゃヤバいぜ。」

マックス

「ああ。今のところ何とか保っているが、長引けば落とされかねない。」

二人は決断を下した。

アクセル

「やるしかねえか。」

マックス

「そうだな。」

二人は新型機の方へ走り出した。ミリスがそれに気付いた。

ミリス

「大尉！何をなさるんですか！」

アクセル

「決まってるだろ！コイツで出撃するんだよ！」

ミリス

「しかし専用兵装の調整が終わってません！」

マックス

「通常の兵装は使えるのだろうか？」

ミリス

「ライフルとブレードは使用できますが…」

アクセル

「んじゃそれで充分だ！」

そう言い残して二人はレギオンmk-2のコックピットに滑り込んだ。

アクセル

「コンソールはレギオンと同じだな。」

キーボードを叩き、起動プログラムを確認しながらマックスに言った。

マックス

「そうだな。同じ感覚で操縦出来るだろう。」

二人は機体のチェックを終え起動コードを打ち込んだ。

低い唸りと共に核融合炉が始動し、機体各所に電力を送り込む。

コックピットのランプやモニターが1つずつ点いていった。

いつの間にか格納庫内の司令所に移動しているラメル司令とミリスから通信が入る。

ミリス

「その機体はレギオンより推力が大きいのでスラスターの吹かし過ぎに注意してください。」

ラメル

「本来ならばまだ出撃させる段階では無いのだが…スマン！」

アクセル

「気にしないでください、司令。試運転も兼ねて行ってきますよ。」

マックス

「それよりどうやって外に出れば？」

質問にミリスが答えた。

ミリス

「資材用のリニアシャフトからお二人を打ち出します。」

アクセル

「荒っぽいなあ、オイ。ま、文句は言えねえけど。」

二人はリニアシャフトに進んだ。

ミリス

「よろしいですか？」

最終確認をとる。

アクセル

「こちらアクセル。準備よし。」

マックス

「こちらマックス。いつでもどうぞ。」

ミリス

「いきます!」

言うと同時にランチ（射出）と書かれたボタンを押した。二人の機体は、パイロットに10Gという凄まじいGをかけながら、リニアシャフトの中を月の表面へと飛び出していった。

ターン7：不慣れ（前書き）

かなり遅くなりました。申し訳ないですm（|）（|）m 書こう書こう
こうと思っんですが、如何せん時間が（汗）。頑張りますんで、お
願いします。

ターン7：不慣れ

月面では地球軍艦隊とインベータ艦隊が壮絶な戦闘を繰り広げていた。

あちこちにレギオンやインベータの主力機（タコに似ているのでオクトと呼ばれる）の残骸が浮かんでいる。

アクセル

「結構やられてるな。」

マックス

「ああ。インベータの方が数が多い。下手すると押し込まれる。」

アクセル

「ささつと片付けるとすつか。」

マックス

「慣れん機体だ。無茶はするな。」

アクセル

「お前こそ、落とされんなよ」

マックス

「行くぞ！」

二人はレギオンと同じ感覚でスロットルを動かした。

次の瞬間機体は爆発的な勢いで加速した。

まるで砲身から打ち出される砲弾のようだ。あまりの加速力に二人の顔がGで歪む。

アクセル

「なんだよ！コレ！！」

マックス

「そう言えばベケット中尉が言っていたな。同じ感覚で使うなと。」

アクセル

「冷静に言っちなよ！」

機体はあっという間に敵味方を通り越して月の衛星軌道付近まで飛

び出した。

アクセル

「やっべえ！通り越しちゃった！」

マックス

「まずいな、戻るぞ！」

二人は機体を月面に向けた。

今度は少しだけスロットルを動かす。

機体は通常の数度で移動しはじめた。敵の集団に移動する間に、体制を整える。

アクセル

「OS異常なし。ウェポンコントロール、起動。」

マックス

「スラスタ制御、オールオート。機体各所オールグリーン。」

アクセル

「よし！行くぜ！遅れんなよ！！」

マックス

「分かっている。」

二人の機体はかなりのスピードで敵部隊に突っ込んだ。

オクトが気づき、横一列に並び緑の光弾を雨あられと撃ち込んだ。た。

だが新たな機体を手に入れた二人にはほとんど効果は無い。

操縦桿とスロットルを巧みに操りすべての光弾を難なく回避した。

アクセル

「この機体、反応速度もかなり上がってんな。」

マックス

「ああ。まるで自分の体のようだ。」

アクセル

「よし、反撃といきますか。」

そう言うなりアクセルはスロットルを開き敵の集団に突撃した。

飛んでくる光弾を姿勢制御用スラスタの噴射反動で回避し、大腿

部のラッチからレーザーブレードを取り出した。

オクトも射撃を停止し長い触手を振るって近接戦に備えている。

マックスはアクセルの突撃を援護するため、照準がズレないようにスラスターを噴かさず慣性で移動している。その状態からアクセルの背後に回り込もうとするオクトを、出力を絞ったレーザーライフルで狙撃していく。

アクセル

「わりいな相棒。」

マックス

「礼を言う間があつたら前を見る。」

アクセル

「前だあ？」

アクセルがメインモニターを見るとオクトの触手が目前に迫っていた。

アクセル

「うおっ!？」

何とか紙一重でかわした。

アクセル

「あ…つぶねえだろが!このタコ野郎!！」

右マニピレータのレーザーブレードを左から右に薙払いオクトを胴で真つ二つにする。

アクセル

「次からは相手選べってんだ。」

そう吐き捨てて操縦桿を握りなおした。

ターン8：混沌

混乱し迷走する地球軍の中で、アクセルとマックスは縦横無尽の活躍を見せた。

敵機の撃ってくる光弾をことごとくかわし、アクセルは切り捨て、マックスは風穴を開けていった。

その活躍を見る内に、浮き足立っていた地球軍も統率を取り戻しつつあった。

アクセル

「やっと味方もまともな反撃出来るようになったな。」

リーダーで戦況を確認したアクセルが、小さな溜め息と共に呟いた。盛り返した味方艦隊が、敗走していくインベータを追撃していく。だがマックスは嫌な予感がしていた。敵の引き際が見事すぎる。

マックス

「……まさか……！」

アクセル

「どうした、相棒？」

マックスはリーダーの探查範囲を広げた。

走査線の走るリーダースクリーンを見ながら、アクセルに返事を返す。

マックス

「引き際が見事すぎる。これだけ見事に引ける理由は一つしか考えられ無い。」

アクセル

「おい……まさか……！」

マックスのリーダーに今まで無かった反応が現れた。熱量からして巨大戦艦クラスだ。

マックス

「畏だ……！」

次の瞬間敵艦から高密度のビームが発射された。

まさかの反撃。

追撃していた筈の味方艦隊は一瞬で消滅した。

更にその艦から、オクトがこれでもかと言わんばかりに出てくる。

あつという間に戦況は逆転した。

敗走していた筈のインベータは、追われる者から追う者になっていた。

アクセル

「残った味方は？」

聞かない方が良いと分かっている、聞かすにはいらなかった。

マックス

「BMは我々を含めて12機、戦艦は3隻。内1隻はエルベラだ。」
迫り来るオクトを片っ端から切り捨てながらアクセルはうめき声をあげた。

アクセル

「全部で15かよ！相手は？」

マックスは天を仰ぎ、溜め息をつきながら答えた。

マックス

「およそ900。」

絶望的な数字だ。彼我戦力差60対1。勝てる見込みは、無い。

アクセル

「どうする？このままじゃジリ貧だぜ？」

マックス

「とりあえず味方と合流するぞ。二人だけではどうにもならん。」

アクセル

「賛成だぜ。5時方向が手薄だから、一気に抜くぞ！」

マックス

「了解だ！いくぞ！！」

二人は味方の残存艦隊目指して、スロットルをフルに押し込んだ。爆発的、かつ殺人的な加速力が二人を襲う。

姿勢制御で手が一杯になる。

と言っても速度があまりにも速すぎる為、敵は照準をつける事は不可能だ。

敵はただその流星のごとき二人を見送るしか出来なかった。残存艦隊は戦艦を中心に、円形防御陣を形成して辛うじて全滅を免れていた。

戦艦の対空機銃砲座が弾幕を張り、その中で生き残ったBMが迫り来るインベードを撃ち落としている。

アクセル

「何とか持ちこたえてたな。」

マックス

「ああ。エルベラも無事だ。」

アレン

「アクセル、マックス！二人共生きていたか！」

通信機越しにアレン艦長の声が聞こえた。

アクセル

「艦長、俺達のしぶとさ知ってるでしょ！この程度じゃくたばりませんよ！」

マックス

「我々も出来る限り援護します！」

アレン

「君達がいると心強い！反撃とまではいかんが何とか持ちこたえるぞ！」

味方艦隊に合流しレーザーライフルで敵機を迎撃しながら、改めて友軍の状況を思い知った。

アクセル

「でも、この戦況はどうしようもねえぜ。何とかしねえとマジにヤバイ。」

マックス

「そうだな。我々の機体の残弾も底をつきかけている。」

どうしようかと考えている時、月基地から通信が入った。

ラメル

「アクセル大尉、マックス大尉！二人共無事か！？」

アクセル

「何とか無事ですが、挽き肉にされるのは時間の問題です！」

一層敵しくなる敵の砲撃をかわしながら、叫びに近い声で答えた。

マックス

「ラメル司令、至急増援を願います！」

マックスのレーザーライフルは既に弾切れになり、アクセルの機体の物を使っていた。

ラメル

「すまんが後5分持ちこたえてくれ！今増援を用意している！」

アクセル

「5分ですか！？持つ自信無いですよ！」

マックス

「もう少し早くお願いします！」

二人も必死だ。

ラメル

「わかった！出来る限り急ぐ！だが5分はかかってしまう！踏ん張ってくれ！！」

そう言つて司令は通信を切った。

アクセル

「5分か。どうやら今まで生きてきた中で一番長い5分になりそうだぜ。」

ターン9：戦乙女

インベータの攻勢は一層強まった。

一機、また一機と友軍が撃墜されていく。

弾切れを起こした機体は、レーザーブレードで無謀とも思える格闘戦を挑んでいった。

たが数に押され、オクトにまわりつかれ機体はバラバラにされた。

アクセル

「多分、地獄だってこれよりはマシだぜ……」

アクセルは目の前の光景をこう例えた。

遂に味方は片手で数えられる程になった。インベータは残った機体を完全に包囲した。 マックス

「どうやら、覚悟を決めねばならんな……」

アクセル

「年貢の納め時って訳かよ。クソッ……」

敵の包囲網の後ろで、部隊を壊滅させた敵艦がビームをチャージし始めた。

オペレーター

「敵艦に高熱源反応！これは……先程のビームです！」

アレン

「八方ふさがりか……！」

敵艦の艦首で光弾が不気味な光を放っていた。

アクセル

「お別れだなあ、相棒……」

マックス

「私達は切っても切れん腐れ縁だ。」

アクセル

「ハハハッ……そうかもな。」

こんな時だが笑ってしまった。

その場に居た全員が死を覚悟した。来るであろう最後に誰もが目を閉じた。

次の瞬間、轟音と共に爆発が起こった。

だが地球軍機は誰一人撃たれていなかった。

それどころか目の前に居た筈の敵艦が、宇宙の塵になっていた。

アクセルは目を開き、目前に広がる光景を見た時信じられなかった。

アクセル

「ど…どうなっただ？」

マックス

「わからんが…助かった…のか？」

状況の掴めない二人に、若く勇み立った声で通信が入った。

???

「アクセル大尉！マックス大尉！後退して下さい！後はこちらが引き受けます！」

通信と同時にレーダーに新たな反応があった。

敵では無いが、該当する友軍データも無い。

反応のある方角に機体を向け、メインカメラでその姿を目視しようとした。そこには一隻の戦艦が映っていた。

しかしその艦は従来の地球軍艦艇とはかけ離れたフォルムをしている。

すらりと伸びた艦首。

x型に搭載されたエンジン。

そして滑らかなシルエット。

データには無かったが、アクセルとマックスはその艦を知っていた。

アクセル

「あ…あれが…」

マックス

「ヴァルキリー…」

二人は戦乙女という艦名に納得した。

確かにそのフォルムは乙女という形容がぴったりだ。

見とれていた二人に、さつきと同じ声で通信が入った。

???

「繰り返します！こちらヴァルキリー艦長、レイド・セイファー少佐です！アクセル大尉、マックス大尉至急後退して下さい！」

いきなりの指令に二人は混乱した。

確かに戦況は圧倒的に不利だ。

さっきの砲撃で敵の数は減ったものの、戦艦一隻ではどうしようも無い程残っている。

更に上級士官の筈の少佐が、こちらが上の様な口調で喋り掛けてくる。

マックス

「ですがレイド艦長、敵はまだ相当数残っています。ここで我々が撤退すれば更に不利になります。」

とりあえず、丁寧に警告をだした。

しかしマックスの警告に返ってきた返事は冷静だが、自信に満ちていた。

レイド

「この艦を普通の戦艦とは思わないで下さい。伊達に戦乙女を名乗っていない事をご覧に入れますよ！」

そう言うなり、レイド艦長はヴァルキリーを敵部隊に向け航行させた。

敵は一斉に襲い掛かろうとした。

が、出来なかった。

サボテンのトゲの様に船体から突き出したヴァルキリーの対空機関砲が、個別に意思を持っているかのごとく正確に狙いを定め、次々にオクトを蜂の巣にしていくな。

正に1対多戦闘のお手本のごとき戦いぶりだ。

アクセル

「すげえ……」

マックス

「見事過ぎて声が出ん。」

レイドは迫り来る敵を迎撃する為に、艦橋で指示を出し続けている。

索敵手

「オクト6機、8時方向より接近！」

レイド

「後部機銃座！近寄らせるな！叩き落とせ！」

オペレーター

「敵艦、2時方向より砲撃！」

敵のビームが艦首をかすめた。

レイド

「前部ミサイル発射管！1番から8番、すべて対艦ミサイルを装填！」

掌砲長

「1番から8番、対艦ミサイル装填完了！」

レイド

「よし！ミサイル発射っ！！」

8基の大型ミサイルが、敵艦に突進していった。
全弾命中。爆音と共に敵艦は塵となった。

オペレーター

「敵機なおも来ます！」

レイド

「艦首連装ビーム砲！出力を落として連射しろ！弾幕を張るんだ！」
艦首両側面に装備された240ミリ2連装ビーム砲が、威力を落とした光弾を敵部隊に向かって立て続けに撃ち込んだ。威力を落としたとはいえ、大口径のビームはインベータを粘土細工の様に破壊していた。

ターン10：離別（前書き）

遅くなりました。 すいません（汗）

ターン10：離別

戦況はまたも一変した。残ったインベータは30分の1以下になった。

アクセル

「すげえな…」

マックス

「信じられん…」

二人はヴァルキリーの圧倒的な性能に、驚嘆と共に希望を持った。

アクセル

「なあ、相棒。この艦なら…」

マックス

「この戦争、終わらせる事が出来るかもしれんな。」

敗色濃厚のインベータはまたも撤退を始めた。

アクセル

「今回は誘ってズドン、って事は無さそうだな。」

マックス

「そんな余裕は無いだろう。最も、誘われてもこの戦力では追撃は不可能だな。」

アクセル

「確かに…」

アクセルは戦い抜いた友軍を見て、溜め息しか出なかった。

戦艦が2隻に^{エルベラとヴァルキリー}BMが4機、死傷者多数。

全滅に近かった。悲壮感漂う二人にアレンから通信が入った。

アレン

「こちらアレン、二人とも撤退行動に移るぞ。敵もこれ以上は攻撃しないだろう。」

マックス

「了解です、艦長。手ひどくやられましたね。」

アレン

「ああ…。犠牲が多すぎる。こんな戦争の為に、あと何人が命を落とさなきゃならないんだ…。」

アレンは軍属になって初めて指揮を執った艦で、乗組員の半数を失った経験がある。

この戦争の酷さをよく知っている一人だ。

アクセル

「そうですね…。こんなクソつたれの戦争、早いとこ終わらせたいもんです。」

重苦しい空気が3人の間に流れた。そこにヴァルキリーから通信が入る。

レイド

「自分もそう思います。ですがそれは後にしましょう。とりあえず後退して体制を立て直さないと。」

レイドの言葉に3人は納得した。

アレン

「そうだな。よし、全部隊月基地に後退するぞ。」

生き残ったパイロットを艦に収容し、ヴァルキリーが基地へ向かう。その後にBMが続き、最後方にエルベラが付いた。

戦闘は終わった。

だがアクセルは何か嫌な予感がした。

具体的にどうと言う事では無いが、どうしようも無く不安になる。

マックスに言おうかどうかと考えていた時、その不安は的中してしまった。

アクセル機の右後方を追従していたBMが突然、爆発を起こした。

アクセル

「おい、なんだ!?!」

マックス

「オーバードロードではないのか!?!」

マックスの仮説は、ヴァルキリーからの通信で否定された。

オペレーター

「違います！6時方向に熱源！オクトです！！」

振り返つてみると、オクトが半壊しながらもビーム砲をこちらに向けていた。

アクセル

「あんな状態でも戦うのかよ！」

マックス

「とりあえず撃ち落とすぞ！瀕死とは言え何をしてくるかわからない！」

アクセル

「けど俺らの機体は弾切れだ！艦に任せようぜ！」

マックス

「アレン艦長！レイド艦長！敵機への砲撃を願います！こちらには弾がありません！！」

レイド

「了解っ！蜂の巣にしてやります！！」

アレン

「こちらからも出来るだけ撃ってみる！」

二隻が砲撃の為に回頭し始めた。しかし判断は遅すぎた。

ヴァルキリーオペレーター

「敵機に高熱を探知！ビーム砲最大出力で来ます！！」

レイド

「回避を優先！艦首下げ角20！当たるなよ！！」

ヴァルキリーが右回りでゆっくりと回頭していた軌道を無理に変えた。

だがオクトの狙いはヴァルキリーでは無かった。

エルベラオペレーター

「敵機にロックされました！」

アレン

「いかん！回避急げ！操舵角左20！！」

艦体が今まで以上の角度で曲がろうとして、傾いた。旋回範囲ギリギリの軌道だ。

エルベラオペレーター

「敵機、なおも本艦を補捉！！ロック外せません！」

アレン

「くそおっ……」

敵機の銃身から光弾が放たれた。

一筋の光の矢は寸分変わらず、エルベラを撃ち抜いた。

最も当たってほしく無かった、ブリッジを。

ブリッジでの小規模な爆発は誘爆を起こし、エルベラは大きな光と熱量の塊となって消滅した。

アクセル

「じ…冗談だろ……！？艦長！応答して下さいっ！艦長！！アレン艦長！！」

余りにも残酷な現実をアクセルは受け入れられなかった。

今はもう使う事の出来ない通信チャンネルに向かって、何度も呼び掛けた。 アクセル

「艦長！アレン艦長！応答して下さい！！」

マックス

「もう、いいだろう…アクセル…」

躍起になって呼び掛ける相棒をなだめた。

アクセル

「でっ…でも、艦長が！」

レイド

「残念ながら…エルベラとその乗組員の反応は…ありません…」

アクセル

「くそおっ！クソつたれ！！」

アクセルはスラスタを噴射して半壊したオクトに突っ込んでいった。

オクトは迎撃しようとは発か光弾を撃ったが、アクセルはそのすべ

てを回避した。

レーザブレードを起動すると大きくふりかぶった。

アクセル

「てめえのせいだ！」

アクセルの怒りと恨みのこもった刃はオクトを縦に斬り裂いた。敵機の爆風を浴びながらもアクセルは微動だにしなかった。

アクセル

「クソお……つちきしょおおッ！！！」

その宙域に悲痛な叫びだけが響いた……

ターン10：離別（後書き）

読んでみて、どうでした？自分の中では戦争にはこういった悲しい一面もあると思い、書きました（出来るなら書きたく無かったんですけど…）。感想や意見を述べて頂ければと思いますm（―）（

ターン11：鎮魂の鐘（前書き）

やっと余裕が出てきたので（遅いですね（^ー^・））後書きに一人ずつ人物紹介を載せていただく事にしました。よろしかったら見てやってください。

ターン11：鎮魂の鐘

ラメル

「…分かった、ありがとう。後はこちらでまとめておくよ。」
司令部からの報告に、吉報は無かった。

戦死263名、負傷425名、BMは大破37機、中破22機、艦船は4隻が破壊された。

膨大な被害だが、それでも戦い続けなければならない。地球を侵略される訳にはいかない。

ラメル

「そろそろか…」

ラメルは時計を見てそう呟いた。

神父

「…神よ、彼らをお導き下さい。彼らこそは、尊き自由の為に犠牲となった勇者なのです…」

月基地にある共同墓地で、先の戦闘で殉死した軍人達の慰霊が行われていた。

中央にある大きな慰霊碑に新たに263人の名が刻まれた。

無論、アレン・ベイカー大佐（殉死後2階級特進）の名前もある。

慰霊碑の前に生き残った人々が並び、一人一人花を供え祈りを捧げた。

アクセルとマックスの姿もある。次々と花が添えられ、アクセルの番になった。

アクセル

「…俺にとって艦長は、信頼出来る上司だけでなく、オヤジみたいな存在でした。艦長の願い通り、この戦争終わらせます。必ず…！」

アクセルは無駄の無い敬礼をした。

その胸元にドックタグ（認識票）が光っていた。
あの戦闘の後、戦域の捜索に出た部隊が偶然見つけた、アレン艦長のドックタグ。

アクセルはそれを貰い受け、自分のドックタグのチェーンに繋いだ。
戦争の最後を艦長に見せる為に。

アクセルは名残惜しげに祭壇を去った。アクセルの次はマックスだ。
マックス

「自分もアクセルも艦長の下で、多くの事を学びました。感謝しています。ゆっくり、休んで下さい。」

マックスは鋭い敬礼を行うと相棒の後を追った。アクセルは窓から外を眺めていた。

マックス

「まだ、事実を呑み込めて無いのか？」

振り返ったアクセルの顔に迷いや戸惑いは無かった。

アクセル

「呑み込んだよ、すっかりな。何時までも下向いてられねえしな。
艦長にどやされちまう。」

マックス

「どうやら吹っ切れた様だな。その方がお前らしい。」

いつもの調子に戻った相棒をみて、マックスは安心した。

マックス

「そう言えばラメル司令が呼んでいたぞ。」

アクセル

「俺らをか？」

マックス

「そうだ。」

アクセル

「何だろうな。」

マックス

「多分、転属先だろう。」

アクセル

「新しい職場か。」

二人は揃って司令官室へ向かった。

ラメル

「よく来てくれた。とりあえず座ってくれ。」

部屋に来た二人は、司令に勧められた椅子に座った。

アクセル

「ラメル司令、お話とは？」

ラメル

「うむ。少し待ってくれんか？もうすぐ彼が来る。」

そう言われしばらく待っていると、扉が開き、若い士官が入ってきた。

レイド

「失礼しますっ！レイド・セイファー少佐、参りました！遅れて申し訳ありませんっ！！」

アクセル

「…元氣いいなあ。」

ラメルは立ち上がってレイドの脇に立った。

ラメル

「知っていると思うが、改めて紹介しよう。ヴァルキリー艦長のレイド・セイファー少佐だ。」

アクセル達も椅子から立って敬礼した。

アクセル

「元第17混成宇宙艦隊、揚陸艦エルベラ所属、アクセル・レイナ―大尉です。」

マックス

「同じくマックス・ドレイル大尉であります。よろしく願います、レイド少佐。」

挨拶された本人はじっと二人を見ていた。

アクセル

「どしたんスカ、少佐？」

マックス

「我々の顔に何か着いていますか？」

レイドの変な行動に二人は困惑した。

二人の質問に答えたレイドの声は、興奮でうわずっていた。

レイド

「自分の目の前に地球軍最高のBM乗りがいるなんて…感激だなあ！握手してもらっていいですか？」

マックス

「…変わった人だな。」

アクセルにこつそりと耳打ちした。

アクセル

「言えてる。」

とりあえず握手を交わす。

ラメル

「さて、挨拶も終えた所で本題に入ろう。」

ラメル自分のデスクから二枚の書類を出して、二人に渡した。

マックス

「これは…」

アクセル

「上からの通達書…スね。」

ラメル

「まあ、読んでみたまえ。」

二人の通達書にはこう書かれていた。

通達

明日1000時をもってアクセル・レイナー、マックス・ドレイル両大尉を第17混成宇宙艦隊所属、揚陸艦エルベラから地球軍参謀幕僚本部付第1特務艦隊所属、強襲戦闘母艦ヴァルキリーへの転属を命ずる。

尚、その際両大尉を少佐へと昇進し、B M 一個小隊の指揮権を貸与する。地球軍最高司令官ドワイト・ラスター

ラメル

「どうかね？」

頃合いをみてラメルから質問がきた。

マックス

「どう…と言われましても。」

アクセル

「えらい事になったな、としか。」

二人は呆氣にとられている。

ラメル

「今地球は混乱の中だ。インベーダや反政府ゲリラの活動で各地の地球軍はまともに職務が出来ない。君達は軍本部付の特務部隊として各地を転戦し、混乱した指揮系統を回復させる、という訳だ。」

アクセル

「面白そうな話しではありますね。」

マックス

「自分も興味があります。」

そう言った二人の目は爛々と輝いていた。

ターン11：鎮魂の鐘（後書き）

アクセル・レイナー

年齢 25歳

階級 少佐

身長 182?

体重 74?

髪 ブラウン

瞳 ブラウン

乗機 レギオンmk-2

地球軍きつてのBMパイロット。高機動近接格闘戦を得意とし、蒼い剣の異名をとる。軍の訓練キャンプ以来の相棒であるマックスとの連携で数多くの戦果をあげた。熱い男で、自分の意見は絶対曲げない頑固者。BMは直感で乗る物と考えている。天性の空間把握能力と反射神経を持ち、まさにBMに乘る為に生まれた様な男。子供の頃に噛まれて以来、トカゲが苦手。

ターン12：戦場…？

アクセルはスクリーンに映し出されるオクトの数に舌打ちした。

アクセル

「チツ、20か…面倒くせえ数だぜ。」

そう言いつつもマシンガンを左マニユピレータに持ち直し、左腰に装備した実体剣マルスギアを右マニユピレータで抜いた。

アクセル

「やれるだけ、やってみつか！」

スラスターを噴射し地面を滑る様に敵に突っ込む。

立て続けに撃ち込まれる光弾。

アクセルは肩アーマーのスラスターを吹かし、ジグザグの軌道を描く。

不規則な動きに対応出来ずオクトの弾はことごとく外れた。

アクセル

「下手な鉄砲は数撃つても当たんねえぜ！」

ヘルメットのディスプレイに映るサイトを、敵に重ねる。

ロックサイトが赤からロックオンを示す青に変わる。

アクセルは左手の操縦桿のトリガーを引いた。

左マニユピレータのマシンガンが削岩機のようなリズムで弾丸を発射する。

大口径の重機関銃弾はオクトの装甲を簡単に貫通した。

アクセル

「よっしゃ、一匹目！」

そのまま銃口を隣のオクトにずらす。

二機目も一機目と同じ運命となった。

さらにスラスターを吹かし、接近すると敵が格闘戦に備えた。

しかし格闘戦こそアクセルの十八番だ。

接近してきたオクトが振るう長い触手を易々かわし、マルスギアを

縦に振り真つ二つにする。

その時、オクトの一機が右から触手を振った。

普通ならばかわせない距離だが、アクセルには通用しなかった。

上体を屈めて触手をかわし、下から斜め上に斬り上げる。またしても真つ二つ。これで残り16。

アクセル

「まだまだ行くぜえ！」

スラスターを噴射し加速しようとした瞬間、スクリーンが真つ黒になった。同時に警告ランプが次々と点灯した。

アクセル

「クソッ！何だつてんだよ！」

悪態をつきつつ機体各所をチェックする。

アクセル

「コンバットシステム、フリーズ！メインカメラ・サブカメラ・センサー各種…クソつたれ！全部駄目かよ！」

機体に激しい揺れが起きた。

恐らくオクトの攻撃だ。完全に無防備な時にやられた為、ダメージは深刻だ

アクセル

「機体損傷率85パーセント！第一次・第二次装甲全壊！ちったあ加減しやがれ！！」

さらにひどい揺れが機体を襲う。

アクセル

「損傷率95パーセント！融合炉に被弾！出力制御不能！！」

核融合炉への被弾は機体の爆発を意味する。

しかし機体は爆発しなかった。メインスクリーンに

作戦失敗　トレーニングモード終了

と出ていた。

アクセルはコクピットハッチを蹴り開けた。

そこはスクリーンに映っていた岩場では無く、ヴァルキリーのBM

格納庫だった。

アクセル

「コラア！ シュウジ！！ テメエ何て設定しやがる！！」

蹴り開けたハッチの脇で若い兵士が笑いを堪えていた。

黒髪でちよつとした美男子の彼は、シュウジ・カラサワ曹長。

新たにアクセルとマックスの部下なったB Mパイロットだ。

シュウジ

「いやあ、すみません少佐。ちよつとやりたくなってしまいました

…」

いたずらっぽい含み笑いで答えた。

アクセル

「次やったら営倉行きにすんぞ！」

アクセルは真面目な顔で言った。これにはシュウジもビビる。

シュウジ

「いいっ！？ 勘弁して下さいよ、少佐あ。」 彼らは総司令部からの
出航許可が出ない為、月基地で1週間足止めをくっていた。

その間に配属になったシュウジが、アクセルの腕前を見たいと言う
のでシュミレータでの訓練を行っていたのだった。

意気揚々と始めたアクセルだったが、シュウジが途中で設定をいじ
りやたら難しくなっていた。

アクセル

「あんなモン出来る奴いねえつつの。」

シュウジ

「蒼い剣ならなんとかするかな、と思ったんですけど。」

反省の色の無いシュウジにもう一つ説教しようとしたが遮られた。

マックス

「その辺にしといてやれ、アクセル。シュウジ曹長にも悪気は無い
だろうしな。」

格納庫の入り口にマックスが立っていた。

隣にもう一人の補充兵、リード・レイヴェン軍曹が缶コーヒーを持

って立っている。

リード

「もう勘弁してやって下さい、少佐。シュウジ曹長も反省されてるでしょうし。」

多少軽い性格をしたシュウジと違い、リードは物静かで理知的な印象を受ける。

アクセル

「お前らがそこまで言うならいいけどよ…」
シュウジは明らかにホッとしている。

リードは缶コーヒーを2つ投げて寄越した。

アクセルは2つともキャッチすると、1つはシュウジに渡した。

アクセル

「んで、何か用か？」

蓋を開けコーヒーを乾いた喉に流し込む。

マックス

「艦長と司令から呼び出した。どうやら出撃が決まったらしい。」

アクセル

「ホントか！？よし、すぐ行くぜ！！」

残っていたコーヒーを流し込むと、缶を握りつぶしゴミ箱に投げた。
腰掛けていたシュミレータのハッチから飛び降り、ブリッジへのエレベーターに向かって走り出した。

シュウジ

「いくら暇だったからって…」

マックス

「走る必要は無いな。」

3人は走り去るアクセルを見ていた。

リード

「我々も行きますか。」

アクセルと違い、こちらは歩いてエレベーターに向かった。

ターン12：戦場…？（後書き）

マックス・ドレイル

年齢 25歳

階級 少佐

身長 185cm

体重 78kg

髪 シルバー

瞳 ブルー

乗機 レギオンmk-2

アクセルと並び称される凄腕BMパイロット。中・遠距離射撃戦の腕前では右に出る者は無く、紅の砲手の通り名を持つ。アクセルとは兄弟同然の絆で結ばれた仲。普段はクールを絵に描いたような感じだが、アクセル同様自分の信念は絶対曲げない。頭脳明晰で熟慮してから行動を好む。実際の射撃の腕もかなりのもので、軍の射撃コンテストでは2年連続優勝した事もある。

ターン13：フリーフィンゲ

ブリッジではレイド艦長とラメル司令が難しい顔をして話し合っていた。

そこに鉄砲弾のような勢いで、アクセルが飛び込んできた。

アクセル

「司令！艦長！出撃決まったんスカ！？」

肩で息をしているアクセルを見て2人は当惑している。

レイド

「少佐：走って来たんですか？」

ラメル

「そこまで急がんでも、任務は逃げたりせんよ。」

アクセル

「そ…そうっスね。」

深呼吸して息を整えていると、追ってきた3人がブリッジに入ってきた。

マックス

「失礼します。」

シュウジ

「命令通り参りました。」

こちらは息も上がっていない。

アクセル

「お前ら遅いぜ？」

リード

「少佐が勝手に走り出したのでは…」

放っておくと不毛なやり取りを何時までも続けかねない。

2人の会話を遮るようにラメルが咳払いをした。

ラメル

「オホン…続きは後にしてくれ。それより、君達に下った任務を説

明しよう。」

6人は宙図台を囲んで向き合った。

ラメル

「現在、君達は幕僚本部所属の特務部隊という扱いになっている。」

アクセル

「何でも屋みたいなもんスね。」

ラメルは苦笑いだ。

ラメル

「まあ、それに近いだろう。つまりインベード以外の敵との戦闘が任務となる事もある。今回の任務はまさにそれだ。」

ラメルは宙図台の上にファイルを置いた。

表紙に赤い文字で「極秘」と書かれている。

シュウジはファイルを開き内容を読み上げた。

シュウジ

「え」と長いんで要約します。

ヴァルキリーは地球の中東に降下し、イスタンブールを拠点とし暗躍するテロリスト「碧の炎」を撃滅せよ……だそうです。」

アクセル

「碧の炎……か。確かに放って置くには、やべえ連中だな。」

アクセルが顔をしかめる。

リード

「自分は名前しか聞いた事が無いのですが、どんな組織なんです？隣に立っているマックスに質問した。」

マックス

「何でも有り、だな。要人暗殺、自爆・サイバー・生物化学テロ、拳げ句に軍のBMをパイロットを殺害してまで強奪する。手に負えん連中だ。」

アクセル

「噂じゃ戦闘潜水艦を2〜3隻持つてるってよ。」

リード

「アクセル少佐のおっしゃる通り、厄介な連中ですね。」

ラメル

「だからこそ君達「ガーディアン」にこの任務が廻ってきたんじゃないか。」

シュウジ

「ガーディアン？」

シュウジを含むB Mパイロット4人がラメルとレイドの方を見た。

レイド

「我々の部隊名です。地球圏の守護神であれ、と言う事で名付けられたらしいです。」

マックス

「なるほど。それでいつ出撃ですか？」

ラメル

「今すぐにでも、と言う事らしい。イスタンブールは近くにアンタルヤ宇宙港が存在している。アンタルヤを抑えられるとかなりマズい事になる。」

アンタルヤ宇宙港は数少ない民間用のリニアドライバー（電磁加速式滑走路）を保有している。

占拠されるとそれをダシに大金を脅し取られかねない。

ラメル

「今はキプロス基地の部隊が警備に就いているが、インベータと碧の炎を相手にかなり疲弊している。そこで唯一身軽に動け、大きな戦力を持った君達に出撃命令が下った訳だ。」

アクセル

「やれやれ。侵略者より先に戦わなきゃなんねえ奴がいるなんてよ。」

大きく溜め息を吐きながらアクセルがぼやいた。

レイド

「仕方ないですよ。」

ラメルはレイドに向き直った。

ラメル

「レイド・セイファーク艦長。君にテロリスト「碧の炎」撃滅作戦への参加を命ずる。」

レイドは敬礼し答えた。

レイド

「了解しました、ラメル司令。乗組員は既に搭乗済みですから今すぐ出航します。ラメル司令はご退艦願います。」

ラメル

「うむ。君達の武運を祈っているよ。」

そう言い残し、ラメルはブリッジから出ていった。

レイドは艦内スピーカーのスイッチを入れた。

レイド

「こちらは艦長のレイド少佐だ。我々に初の任務が下った。テロリスト碧の炎を撃滅せよとの事だ。厳しい任務だが、我々なら乗り越えられる。全員生きて家族の元へ帰ろう！」

レイドの演説に艦内各所でやる気の籠もった歓声が上がった。

レイドルが切り離される。

掌砲長

「こちらCIC（戦闘情報センター）。全兵装異常なし。」

副長

「全ハッチ気密を確認。すべて正常、オールクリア。艦長、発進準備完了です。」

すべての報告を確認すると、レイドは艦長席に座った。

レイド

「これよりドッキングベイを離れる。微速前進。」

エンジンに推力が伝えられ、ヴァルキリーがゆっくりとドッキングベイを離れていく。

レイド

「こちらヴァルキリー。管制室、出航許可を。」

管制官

「こちら管制室。貴艦の出航を許可する。君らに神の加護があらん事を。」

レイドは管制官の心遣いをありがたく思った。

レイド

「ありがとう。頑張るよ。」

管制室の窓越しにラメル以下月基地の兵が敬礼をしている。レイドも立ち上がり答礼をする。

副長

「艦長、ドッキングベイを完全に離れました。」

副長の報告にレイドは頷くと艦長席に座り直した。

レイド

「よし！全速前進！ヴァルキリー発進！！」

推力中継機に更なるエネルギーが送られ、エンジンが力強く唸りをあげる。

ヴァルキリーは格納されていた主翼を開くと、光の筋を引いて飛び立った。次なる戦場、地球へと…

ターン13：フリーフィンゲ（後書き）

レイド・セイファー

年齢 22歳

階級 少佐

身長 180cm

体重 64kg

髪 ブロンド

瞳 ブルー

若くして新鋭艦ヴァルキリーの艦長に任命された新米士官。軍大学の艦戦シミュレータでは無敗を誇り、彼専用のレベルが作られたほど。アクセルとマックスを尊敬していて、彼らに対しては丁寧語を使う（例えば自分の階級が上でも）。真面目で一本気な性格だが、突発的な事態にも柔軟に対処できる思考を持ち合わせる。モットーは自分に厳しく他人に優しく。格闘技が得意で柔道は黒帯という腕前。

ターン14：浮かぶ疑問

非番で眠っていたアクセルをたたき起こしたのは、けたたましい警報とスピーカー越しに聞こえるレイドの声だった。

レイド

「本艦航路上にインベータの艦隊が出現！総員第一級戦備配置！B Mは緊急発進！！」

アクセルはTシャツに軍服のズボンという寝ている時のままの恰好で部屋を飛び出した。

隣の部屋からは同じような恰好のマックスが出てきた。

マックス

「眠れたか？」

アクセル

「いい気分になってたトコだ。」

エレベーターに乗り、艦のほぼ中央にあるBM格納庫を目指す。途中で寝間着のまま戦備配置に就く兵を何人か見た。

アクセル

「タコ連中もこっちの都合考えろよな。」

アクセルの愚痴にマックスは溜め息混じりに答えた。

マックス

「相手の都合を考えて戦争する奴がいると思うか？」

アクセル

「ごもつとも……」

扉が開くと、ロッカールームに駆け込んだ。

パイロットスーツを着込みヘルメットをかぶる。

耳の脇にあるスイッチを回すと透明のシールドが顔を覆った。

ロッカールームのエアロックの向こうは真空の格納庫だ。

エアロックの二重ドアをくぐると、宇宙服を着た作業員が慌ただしく動いている。

「リード機、シュウジ機共に発進準備完了！」

「アクセル機、マックス機の準備急げ！」

機体に付けられたコネクターやパイプが手際良く外され、グレーに塗られたシュウジ機とグリーンに塗られたリード機が発進の為にカタパルトへ向かう。

アクセル達が自分の愛機に乗り込む時には、カタパルトから漆黒の宇宙に飛び出していった。

アクセル

「あいつら無茶しねえといいが……」

マックス

「我々も急いで追うぞ。」

狭いコクピットの中で手際良く発進準備をこなす。

あらかた終わったところで通信用スクリーンにレイドが映った。

レイド

「当直のシュウジ曹長とリード軍曹が先行しています！追いかけて援護願います！」

アクセル

「了解っ！アクセル機、起動完了！」

マックス

「こちら準備完了だ。」

2人の機体が起動し、カメラアイが鈍いグリーンに光る。

オペレーター

「アクセル機は右舷、マックス機は左舷のカタパルトを使用して下さい。」

2人左右に別れそれぞれのカタパルトに機体を載せた。ロックボルトが締めまり機体を発進可能状態にする。発進の衝撃に備え機体の腰を落とした。

アクセル

「カタパルト接続確認。いつでも行けるぜ！」

オペレーター

「了解。アクセル機射出カウント。3、2、1…スタート！」

カタパルトが高速で前進し、アクセルと機体を加速させる。

カタパルトが端に当たるとロックボルトが解除され、機体は弾丸のごとく飛び出す。

アクセルは不安定になる機体を制御しつつ、敵部隊に突っ込む為にスラスターを吹かした。

左舷から出てきたマックスも後を追うように加速した。

前線ではシュウジとリードが奮戦していた。

敵の多さに苦勞しつつも、1機ずつ仕留めていく。

シュウジ

「こいつら何匹出てくるんだ!？」

肩に装着した個人武器のチェーンガンで弾丸をばらまきながら絶叫する。

リード

「私に聞かないで下下さい曹長！」

リードも肩のレーザーカノンで敵を確実に撃ち抜く。

善戦はしているものの、ジリジリと数に押されている。

ましてや彼らの機体は個人武器以外はノーマルのレギオン。

質で勝るものの2機ではどうしようもない。

シュウジ

「ジリ貧だぜ!どうする!？」

空になったチェーンガンの弾薬パックを外しながらリードに名案がないが尋ねる。

不意にオクトが表れた。

しかもシュウジ機の正面だ。パックを交換中ではまともに応戦できない。

シュウジ

「やべえっ！」

リード

「曹長っ！」

リードがレーザーライフルを向けようとするが、到底間あわない。しかし後ろから飛んできた弾丸がオクトを蜂の巣にした。

アクセル

「バカヤロウ！無理すんな！！」

アクセルは右手のマシンガンで牽制しつつ、シュウジとリードの前に出た。後ろにはマックスも続く。

シュウジ

「少佐！遅いですよ！！」

アクセル

「悪かったな！ヒーローは遅れてくるモンなんだよ！」

古臭い台詞を吐きながら若い2人を援護する。

マックス

「とりあえずは無事だな。ここから押し返すぞ！」

シュウジ&リード

「了解っ！」

こうなるとアクセル達は俄然有利だ。

アクセルの無謀とも言える突撃をマックスがレイルガンでサポートする。

シュウジとリードは背中合わせにくつつき互いの死角をカバーしあう。

更にヴァルキリーからの正確無比な艦砲射撃。敵は総崩れになり撤退を始めた。

アクセル

「ケツ、脆い連中だな。」

シュウジ

「どうします？追っかけますか？」

マックス

「必要ないだろう。我々には碧の炎の掃討作戦に参加せよと命令がきている。時間を無駄にはできない。」

リード

「そうですね。……ん？」

リーダーを見ていたリードは異変を感じた。

リード

「アクセル少佐、敵が一機動かずに停止しています。熱反応もありません。」

アクセル

「怪しいな。どうする相棒？」

マックス

「捕獲してみるか。敵を知れば、こちらも策を立てやすい。」

マックスの提案を艦長も了解し、オクトは捕獲されヴァルキリーのBM格納庫に収容された。

機体の調査はミリス中尉が行うことになった。

収容されたオクトの回りを銃を持った兵士が取り囲み、アクセル達もコクピットハッチを開けて自機の兵装をオクトに向けている。

その中でミリス中尉は部下の技術士官と共にオクトの調査を行っている。

士官

「中尉、ハッチらしき物があります。開きますか？」

士官の指差した先には70cm四方のハッチがあります。開きますか？」

士官の指差した先には70cm四方のハッチがあった。

ミリス

「そうね。開けてみましょう。気を付けてね。」

士官が作業用の小型レーザーカッターでハッチを切っていく。

士官

「切れました。開きます。」

銃を構える兵士達に緊張が走る。士官はゆっくりと切られたハッチを持ち上げた。

アクセル

「…何も出ない…な。」

全員から溜め息が漏れた。ミリスはオクトの中に入り、内部の調査を進める。

ミリス

「そんな！？どうして？」

ミリスの声は明らかに困惑の色を帯びていた。

マックス

「どうした、中尉？」

マックスの呼びかけに、ミリスは頭をハッチから出して答えた。

ミリス「この機体の部品の85%が地球で普通に作られている物なんです。残りの15%も特注品ではありますが、入手不可ではありません。つまりこの機体は……」

マックス

「地球製……と言うことか。」

有り得ない事実。しかし目の前にその事実が存在していた。

アクセル

「ヤツらは地球に拠点を造ってるって話じゃねえか。どっかの軍事企業の倉庫から盗ってきたんじゃないのか？」

アクセルの言うことにも一理あった。

マックス

「この戦争、どうやら単純なモノでは無いのかもしれない……」
その場の全員が地球の技術で造られた侵略者を凝視していた。

ターン14：浮かぶ疑問（後書き）

シュウジ・カラサワ

年齢 19歳

階級 曹長

身長 177?

体重 54?

髪 ブラック

瞳 ブラウン

乗機 レギオン（チェー ンガン装備）

ヴァルキリーに配属された新米BMパイロット。軍入隊時は宇宙戦闘機に乗っていたが、適性が認められBMパイロットとなる。陽気で周囲を盛り上げるムードメーカー。ペアを組むリードとはヴァルキリーに配属されてからの付き合いだが、その連携はアクセル達にも引けを取らない。とてつもなく酒に弱く、ビールをコップ半分飲んだだけで気絶したことがある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949a/>

虚空の戦場

2011年1月26日04時22分発行